

甲南大学 総合研究所報

甲南大学総合研究所 神戸市東灘区岡本8-9-1 電話(078)431-4341

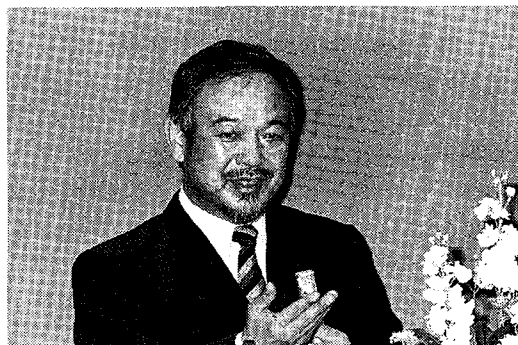
第6回公開講演会 「アメリカの日本料理ブーム」

— その文化人類学的考察 —

講師 国立民族学博物館教授 石毛直道氏

総合研究所は、1987年11月13日午後3時より10号館1011教室にて、石毛直道氏を招き、公開講演会を開いた。同氏は、京都大学人文科学研究所助手、甲南大学文学部助教授を経て、現在、国立民族学博物館教授をされている。

タンザニア、リビア、トンガ王国、西イリアン、ハルマヘラ島など世界各地で調査及び研究に従事されてきた。著書には、「リビア砂漠探検記」（講談社、1972）、「環境と文化——人類学的考察」（日本放送出版協会、1978）、「論集 東アジアの食事文化」（平凡社、1985）など多数ある。1972年に第7回渋沢賞（日本民族学振興会）、そして1983年に日本生活学会研究奨励賞を受賞されている。以下に、文学部森茂起講師にまとめていただいた講演要旨を掲載する。



講演要旨

先生は、1978年頃から始まったアメリカにおける日本料理店ブームを、1980年に先生自身が行ったロサンゼルスでの調査をもとに、多くの事例及びエピソードなどを紹介されながら講演された。ここですべてを紹介することはできないが、以下に概略を報告します。

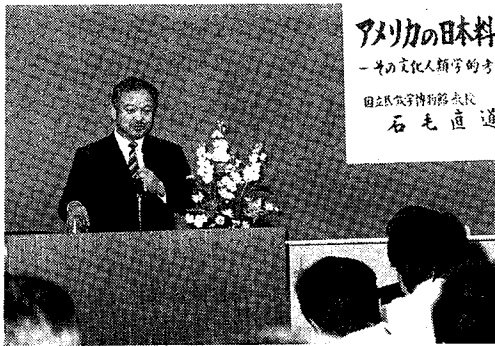
まず、日本料理店ブームの意味を考えると、それは、料理に加えて、建物、インテリア、食器などの大衆文化がセットになってアメリカに入り込んだこ

とであり、それまでの、能、茶道、歌舞伎などの古典芸能に限定された関心よりもっと大きな文化変容の問題と考えられる。

料理のスタイルの特徴には、まず、コンビネーションというメニューがあげられる。これは、テンプレ、トンカツ、テリヤキなどの単品メニューを組み合わせ一つ皿に盛り合わせたもので、料理の種類が少なくとも組み合わせで多くのメニューを用意できるという便利さがある。それに、量が多くて平均して日本の倍はある上に、皿全体を料理がうめつくすという盛り方になっている。リッチな気分を味わう、米を主食にしないでおかずで満腹するように、などの理由があるのでしょう。味つけは全般に甘くなる傾向があり、理由はよくわからないが、西洋料理にない新しい味が強調されているなどの特色があるようです。

もう一つの重要な料理は寿司です。すべてカウンター形式になっており、料理人と話しながら食べて客とおし友達になるなどのコミュニケーションの場の役割をはたしています。また、魚＝健康という良

いイメージが形成されており、これは、日本人のイメージ自体が変わってきたことと関係があります。



1942年の調査で、「ゆだんならない」、「ずるい」などのイメージが多かったのが、「よく働く」、「芸術的」などのイメージに変わり、それが洗練された寿司のイメージと結びついて現在のブームになっているようです。

ですから、日本料理のブームは、アメリカ人の日本人に対するイメージの変化にもつながり、それは同時に、特にベトナム戦争以後、アメリカ人自身が変化してきたことのあらわれと考えられます。料理のブームは、こうした文化変容の問題と密接に結びついているのです。

昭和62年度研究チームの中間報告

アメリカにおける子供。

その文化的・社会的意味

研究チーム 谷本 泰三 (文) 松尾 恒子 (文)
斎藤 豊治 (法) 青山 義孝 (文)
大森 義彦 (文)
池田 啓子 (イリノイ大学)

総合研究所委員会企画の「アメリカ研究」を引受けた今回のチームは、アメリカ思想史の流れに現れる子供のイメージとアメリカの実社会における子供の状況との間の相違点や落差をみることを研究の目標とした。ところが、突然、当初研究に加わる予定のイリノイ大学ロバート・クロウフォード教授の訃報をきいた。有力メンバーの参加に大きい期待をかけていたのでショックであった。さいわい、その後イリノイ・センターへ着任された池田啓子所長が新しく加わり研究体制ができ上がったのは、1987年9月に入ってからであった。

これまでに10月14日、12月18日、1月22日、と3回研究報告会をおこなった。報告者とそのテーマは、文学部助教授 青山義孝 「ピューリタンと子供」、法学部教授 斎藤豊治 「アメリカにおける少年非行と社会の対応の変遷」、文学部講師 大森義彦 「現代アメリカ小説における子供」である。

青山研究員は、17世紀のピューリタンの子供観の特質を、南北戦争前の19世紀の文学作品に現れる子供と比較し、説明した。19世紀は、子供を天使的存在としてとらえる。エマソンは、子供にメサイアの

イメージを与えているほどである。天使的な子を描くホーソンが破壊的な子にこれに対置させたり、メルヴィルが子供に魔性を見たりしたのは例外なのだ。ところが、17世紀では、全く様子が異なっていた。カルヴィン主義の信奉者ピューリタンたちには、回心体験と洗礼とを経ずには罪からの自由はありえない。したがって、回心体験のない幼児も亡ぶべき運命にあるとされていたし、邪悪さを内包するもの、と考えられていた。17世紀の詩人マイケル・ウィグルワースの作品が例示するとおりである。

斎藤研究員は、アメリカの少年非行に対する法制度の対応の変遷史を明らかにしつつ、その思想背景を説明した。少年の保護を理念とすることで、アメリカは少年裁判所を中心とした独自の司法制度をつくってきた。この、いわば国親思想ともいべきものによる少年司法制度は、1967年に見直しがなされ、再編成されることとなる。この動きは、保護を掲げておきながら、刑罰よりひどい状況がある、という現実を是正しようとするものであったし、非行少年の増加傾向に対処しようとするものでもあった。その内容は、警察扱いを少なくしようとする非犯罪化、公式手続の回避、種々の教育制度を整備することによる非施設収容化、大人に与えられる基本権を少年にも認める適正手続きの尊重、などである。

大森研究員は、伝統的に子供を主人公とするアメリカ小説は、子供の現実を描くことにあるのではなく、作家が小説の世界を構築する際の視点を子供に置いたものだ、と指摘する。そして、現代の作品に

現れる子供たちは、アメリカン・アダムの神話と重なり、19世紀小説の無垢なる子供の生まれ変わりなのである。サリンジャーやペローの反主知主義的テーマを支える子供がそうだ。ペローの子供からは、科学に不毛性を見たワーズワースの声さえ聞こえてくるのだ。現代アメリカ小説が見せるのは、大人が営む悪の世界を覗き見はするが、それには参入しない子供なのだ。ところが、ナボコフ、コジンスキー、オーツなどでは様子が変わってくる。この作家たちが描き出すのは、邪悪なる存在としての子供たちなのである。

発表会は、いずれも活発な質疑応答で締めくくられ、充実したものであった。(谷本)

イメージと文化に関する研究

研究チーム 井上 忠司(文) 上村 邦子(文)
岡田 康伸(文)
デビッド・ライクロフト(文)
高坂 薫(文) 谷口 文章(文)
谷本 泰三(文) 寺島 樵一(文)
永友 育雄(経) 西田 英樹(文)
久武 哲也(文) 藤岡 喜愛(文)
藤本 建夫(経) 堀 直(文)
松尾 恒子(文) 森 茂起(文)
衣笠 茂(大手前女子大学)
市川 浩(明治大学)
上原 輝男(玉川大学)
加藤 隆久(神戸女子大学)
河合 隼雄(京都大学)
小坂 英世(小坂医院)
西際 好誉(香道)
樋口 和彦(同志社大学)
和田 邦平(県立歴史博物館)
並河 信子(松陰女子学院大学)

本研究会は、イメージという概念によって各学問分野を結びつける学際的試みをして始められた。現在までに6回(特別研究会を含む)の研究会が持たれている。ここで、研究会の概要を紹介して中間報告とする。

第一回研究会は、堀研究員による「ウイグル族の伝説と民話」であった。動物譚、魔法話、イスラム古伝承などのモチーフの中に、歴史的特殊性と普遍性の両方が混在している。堀研究員は、この発表後、現地での研究を行なうため半年の在外研究に出発し

た。本発表はそのための問題整理の意味があり、帰国後の研究成果の報告が待たれるところである。

第二回は、学外研究員の並河(心理学)による「子供の本における老人と子供」であった。ユング心理学で弱いとされる発達の問題に対する、元型やイメージの概念を用いてのアプローチである。スライドを用いた多くの実例が示され、多くの本に見られる共通のモチーフが紹介された。討論で、社会科学の立場から、特定の地域に研究を限定せず、共通のテーマだけをたよりにあらゆる時代、あらゆる国の作品を扱う方法論への問題提起がなされた。これは本研究会でしばしば取り上げられる問題である。つまりおおざっぱに言って、心理学系の立場に立つものは、イメージやシンボルそのものの普遍性を重視し、歴史的背景、地理的背景を軽視する傾向があるのに対し、社会科学系の立場に立つものは、その逆である。この面者の方法論的相違はかなり根本的であり、それぞれへの批判、異和感をひき起すもののようなのである。それだけに、今後の研究会の中でも論じていくべき問題と思われた。

第三回は、和田研究員の所属する兵庫県立歴史博物館で「オバケ、妖怪、幽霊」展が開かれたのを機会に、同館学芸員の近藤雅樹氏を招いて研究会を持った。今まで本物ではないとして博物館で扱う対象とはならなかった「人魚のミイラ」などを展示したことの学問的意味や、民間伝承、言い伝えなどに含まれる豊富なイメージが紹介された。芸術的価値や、歴史的資料としては価値のないものであっても、我々の生活に影響力を持つという意味では、それらのイメージの持つ力は無視できないと思われた。

第四回研究会は、谷口研究員から「宗教、催眠、箱庭をめぐる無意識の世界——哲学への導入のためのエッセー」と題する報告があった。心理学によって発見された無意識の世界の存在を示す例として催眠の実例などが示された。そして、無意識の世界を哲学の理論の中でどう扱うかという試みが紹介された。

第五回研究会は、学外から遠藤保子氏(舞踊学)を招き、「舞踊における身体イメージ」と題して話していただいた。「シンボルと元型研究会」からしばしば扱われた身体性の問題への一つのアプローチであり、ナイジェリアのヨルバ人の踊りに関するフィールドワークの結果を元に、西洋、あるいは日本の舞踊との大きな違いが、多中心性という概念で扱われた。

以上が、研究会の概要だが、12月には、恒例となった「香の会」が開かれ、体験的に文化を知る機会を持った。今後も、発表会を重ねることで、研究員間の相互刺激をはかり、実りあるものにしていきたいと考えている。(森)

海浜社会の伝統と変容

— 志摩半島・海女集落のエスノグラフィー —

研究チーム 井上 忠司 (文) 久武 哲也 (文)
三島 康雄 (営) 道之前允直 (理)
森田 三郎 (文)
中田 睦子 (親和女子大学)
デビット・プラス (イリノイ大学)
金 栄敦 (済州大学)

本年は、初年度であるので、定期的な研究会での討議とならんで、次の2点を中心として研究活動を行った。まず原則として研究員は、全員最低一回以上、現地調査をおこなうこと。2番目には、調査地域および海女に関連する文献記録、調査報告書、写真、地図などをできるだけ多く収集し、各研究員が共同で利用できるデータ・ベースを作成することである。

第一の現地調査については、金栄敦(済州大学校教授)研究員の来日予定がスケジュールの都合で延期になり、すべての研究員が今年度中に現地をみることはできなかった。しかし、他の研究員は現地(志摩町布施田地区)に宿泊し、海女たちの生活を直接みることができたので、ほぼ目的は達成できたと考えている。とりわけ道之前研究員が、海女(舟人海女)と一緒に潜水し、海中での作業を観察できたことは、収穫であった。

プラス(イリノイ大学教授)研究員は、5月末に来日し、日本の研究員と打ち合せを含めた研究会に出席した。その後8月初めまで滞在したが、その間、1ヶ月以上は、布施田での調査活動にあたった。また、人類学雑誌ETHNOLOGY(26巻3号:1987.7)にヒル(Jacquetta Hill:イリノイ大学)教授と共著でプラス研究員の論文が掲載された。“The Reefs of Rivalry: expertness and competition among Japanese shellfish divers”というテーマで、布施田の浜を舞台とした海女の専門的技術習得過程を分析したものである。

第二の資料収集についても、充分とはいえないが、志摩半島の郷土誌や布施田に近い地区についての民

俗学、社会学、経済学などの分野からの調査報告書を集めた。また調査地区布施田については、海女たちの活動領域である海底の詳細な地図や植生や生物資源調査報告書や写真なども手にいれることができた。陸上の地図や航空写真と連結して分析するというのが当初からの研究目的の一つであったが、その基礎的データはほぼ集まった。

布施田海女組合の水揚げ帳および出漁などのわかる漁協の日誌などの一次資料もある程度得られた。また真珠業関係の資料についても、一般的な情報は鳥羽市の真珠博物館の、そして布施田のものは地区の真珠組合の協力が得られた。さらに布施田で真珠加工業を営むかたわら郷土写真家としても知られる浦口氏の膨大な写真も貴重な生活資料といえる。これにより、布施田地区の生活がどのように変わってきたかをあとづける準備がひとまずはできたといえる。

ただ今年度は高齢者の生活史を収集することが充分にはできなかった。また布施田地区の特徴を明らかにするための近隣地区への実地調査も、不十分であった。日本各地の海女に関する調査報告書などデータ・ベースの充実とならんで、それらを来年度の中心課題としたい。

また来年度には、現地での補足調査および定例研究会とともに、金研究員の来日、志摩半島海女調査と日本側の研究員による済州島海女調査を計画している。(森田)

戦後日本の社会文化

研究チーム 安西 敏三 (法) 田中 秀夫 (経)
丸田 隆 (法) 小島 修一 (経)
大津 真作 (文) 斧谷彌守一 (文)

本研究チームは、現在、先発の「戦後日本の経済文化」チームと合同で月例研究会を続けている。時にはかなり激しい議論の応酬も行われるが、容易に結論らしきものは出ない。同時代史には、各人各様の個人史がまといついてくる。だからこそ面白いともいえる。更には、リオタールのいう「メタ物語に対する不信感」が瀰漫する状況の中で、同一的な一本の筋を見出すことは困難を極める。だが他方では、既成の、あるいは更新された「メタ物語」は真に解体されたのか、という疑問が常につきまとうのも確かだ。

各研究員の研究状況は以下の通りである。

「戦後政治考」(安西 敏三)

「民を安んずるに在り人を知るに在りと云二句は、聖門の万病円なり。制度を立かへるやうなる大儀も、此の二句に非れば功をなすこと能はぬ也。」とは今から約250年程前の政治哲学者徂徠萩生惣右衛門の名言にして銘言である。戦後政治はむろん江戸幕藩体制とは異なり、近代デモクラシーをその正統理念として出発した。けれども現今の政治家の挙動を見れば、そこに日本政治に一貫して持続している行動様式が依然として見られる。そうしてそれにたいする正統的批判様式は西洋近代ハイカラ社会科学であるといつて過言ではない。私はこれを積極的に評価するものであるけれども、持続する行動様式であるが故に江戸期の批判様式を、たとえそれが古典中国ハイカラ儒学に拠っているにしろ、戦後政治を見るうえで仮に導入してみてもどうであろうか。さしあたり先の政治哲学者の目でもって戦後政治を考えるうえで無視できない政治家吉田茂をその一つのケーススタディーとして見ているところである。

「市民社会論の現在」(田中 秀夫)

戦後直後から1970年頃まで、「市民社会」という言葉は、学会のみならず論壇、ジャーナリズム、さらに巷において、日本社会が実現を目指すべき、積極的なプラス・イメージをもった社会の理念として、熱い心をもって語られた。「市民社会」の内実をどのように考えるかは、必ずしも明確ではなかったが、日本社会が欠いている、民主主義・人権・国富・自由・参加・平等・公正を十全に備えた望ましい社会、現実の資本主義も社会主義もともに批判しうる「近代社会」の理念型といえるようなものであった。しかし、70年代以後「市民社会」の語は急速に没落してきた。それはなぜか。それは再び知識人の敗北であったのか。しかし、今西欧と日本でまた「市民社会」を問い直す潮流が細々と復活し始めている。シヴィック・ヒューマニズムがそれである。徳・公共精神を強調する新しい「市民社会論」は戦後の「市民社会論」の弱点を克服できるのであろうか。

「戦後日本の法文化」(丸田 隆)

戦後の司法過程における市民参加の可能性を、戦前に存在した陪審制度の運用と機能を素材として、考察を進めている。たとえば、陪審制度がどのようにおこなわれ、それが何故中止のやむなきに至ったか等の検討は、「国民性」を理由とする司法過程への市民参加悲観論、ないし否定論の妥当性を検証することに有用だと思われるからである。

「戦後日本のソ連観」(小島 修一)

近年、ロシアと日本との交流史に関する研究が活発となり、日本人のロシア・ソヴェト観を取り上げた書物もいくつか出版されている。本研究では、こうした仕事の成果から学びながら、できればロシア人の日本観にも注目しつつ、日本人のロシア・ソヴェト観の特徴を明らかにしてゆきたい。日本とロシアの相互認識の構造を検討することによって、この両国の伝統的な社会構造と近代化過程の比較研究に新たな光を当てようとするのが、この研究のねらいである。

「戦争責任」(大津 真作)

わが国の敗戦以来40年以上もたって、ようやく日本の軍国主義がアジア・オセアニアの諸国民に与えた塗炭の苦しみについて、マスコミ等でとりあげられるようになった。しかし、われわれが少しでも加害者としての日本と日本人を告発しようものなら、売国奴という非難を浴びる雰囲気は、以前にもまして強まってきている。こうした戦争責任追及の遅れと弱さは、わが国の敗戦の特殊事情からきている。国内的には、反戦勢力が根こそぎ弾圧されたこと、国外的には、日本が主として、もうひとつの帝国主義国によって単独占領され、最大の戦争犯罪勢力が温存されたことである。この点を明らかにし、未来に向かって日本と日本人のありかたを論じるために、二つの視点から研究をすすめている。ひとつは、帝国海軍において唯一の反戦主義者であった井上成美大将の思想と行動を明らかにすること、もうひとつは、日本の戦争捕虜の社会学的生態である。

「戦後日本におけるモノとコトバの関係」

(斧谷 彌守一)

戦後初期の広告のコピーは、モノの特性に即してそれを説明し、このモノを買って生活を豊かにしようと呼び掛ける態のものが多く、啓蒙的であった。高度経済成長期に、広告のコトバがモノ離れを始めた(イメージ広告)。80年代になると、モノが社会に行き渡った状況の中で、企業の側も、もはや一般的にモノを売ることでは立ち行かなくなり、モノを差異化し、それに応じて広告のメッセージも特定の層に絞って差異化する傾向が目立ち始めた(セグメンテーション)。問題は、この差異化が個性を助長するのではなく、実は特定の層を層として操作することになっているのではないか、イメージが企業によって操作される時代が到来したのではないか、ということである。(斧谷)

不確実性下意志決定モデルの経済・経営への応用

研究チーム 下条 哲司 (理)
中山 弘隆 (理)
中森 義輝 (理)
大野 勝久 (名古屋工業大学)
布上 康夫 (営) 小林 清晃 (経)
佐藤 治正 (経)

(1) リスク下での合理的経済行動の理論モデルの設定とそれによる定性的分析

- ① Von Neumann-Morgenstern 効用理論の大きな業績は、リスク下での人間行動を示す一つのモデルとしての期待効用仮説に数学的に厳密な理論的根拠を与えたことである。したがって、現実の場では、個々の選好の中でそれに適合しないものはいくらかでも見受けられる。実際、Von Neumann-Morgenstern がその公理系を提案した頃、すでに Allais による有名な反例や、近年行動科学的観点から数多くの反例が報告されている。

Von Neumann-Morgenstern 効用関数において価値とリスクを混同して計算しているという指摘が近年幾人かによってなされており、価値とリスクを分離して評価することによって、先に述べた種々の反例を克服できることがわかってきている。本研究では、Von Neumann-Morgenstern 効用理論における問題点を再検討し、実際問題の場でも有効な新しい効用理論を模索している。

- ② Thunen の「孤立国」以降、立地論の系譜には多くの成果が見られる。しかし、それらは殆ど全て“確実性”の世界におけるモデル及び分析から得られたものである。現実には、立地の意志決定者は、彼をとりまくさまざまな“不確実性”要因の影響を受けながら、合理的決定を行おうとする。市場的不確実要因（価格、需要量）のもとで、企業はいかなる立地行動をとるか。その理論的考察が一つのテーマである。

本年度は特に Moses, Sakasita, Mathur, Khalili 等の先駆的業績の検討を経て、それらのモデルにいかなる形で不確実性を導入すればよいかに焦点をしばり、研究してきた。次年度にはさらにそれらを発展させた内容のモデルを設定・分析し、有意義な帰結に到達したいと思っている。

(2) 需要予測モデルの開発とそのシミュレーション分析

勘を顕在化し、勘でしか解決できないと考えられてきた情報処理を、コンピュータを利用した明示的な情報処理として表現したいと考えている。本年度の研究は、主として積み上げ方式と言われる予測方式に集中した。これを、コンピュータによって処理するためには、グループ内の各主体が同様に行動するという仮定が成り立つような形で、経済主体をいくつかのグループに分割する必要がある、そうした上で、グループ毎の行動様式をシミュレートすることによって、全体の子予測が可能となる。また、全体としての整合性が達成されるまで、分解と集計とを繰り返すことも考えている。

(3) マイクロ・コンピュータ用の対話型意志決定システムの開発及びその応用

大規模かつ構造の曖昧な対象に対するモデリングを支援するコンピュータシステムを開発中である。このシステムは、因果構造を専門家の知識を基に、データで裏打ちしながら対話的に決定するシステムで、情報の整理とモデルクラスの決定、モデル構造の探求とパラメータ推定、及びモデルの懸賞という三つのステージからなる。現システムは約150の対話場面からなり、情報のグラフ表示を重視することにより、目的に応じたモデリング及びシミュレーションを柔軟かつ短時間で実行できる。次年度の課題としては、需要予測モデル開発及びシミュレーションへの応用により研究を発展させたい。

本研究は、リスク下での企業行動のモデル化、あるいは交通、通信、エネルギー産業等における経済的問題について、最適制御理論やORの手法を応用し、具体的な数理モデルの構築とモデルの現実問題への適用を行おうとするものである。現実の不確実性あるいはリスク下における企業行動の分析はこれまで十分なモデル化がなされておらず、この分野の研究を発展させることが重要である。

当研究チームは、初年度、定期的に研究会をもち、各自の研究成果を報告し議論を深めてきた。次年度は、初年度の研究を発展させ、具体的問題に対する基本的なモデル化を進めて行きたい。

昭和63年度研究課題および研究チーム

<研究所委員会企画のもの>

平生鈺三郎とその時代

●研究内容の概要

甲南学園の創設者である平生鈺三郎の総合的研究は、第Ⅰ期が「平生鈺三郎の日記に関する基礎的研究」、第Ⅱ期が「平生鈺三郎の総合的研究」であった。そうして、平生の経済人、実業家、教育家さらには政治家としての諸側面についての研究を行った。その結果、平生は想像以上に日本近代史に影響を及ぼしていることがわかってきた。そこで今回は日本経済史や日本外交史を専門とし、しかも平生がなんらかの形で関与した時代の政策等を研究しておられる研究者を新たに3名加えて、平生の実業家としての生活、平生の若き時代に影響を及ぼし、しかもその作品に平生が投影されている二葉亭四迷と平生との関連、平生の自叙伝の日本近代史にもつ意義、さらに東京財界とは一線を劃していた大阪財界における平生の役割、また母校である東京商大に対する資金援助における平生の位置、加えて、大陸政策とりわけ満州政策に対する平生の思想と関与の問題、川崎造船所社長時代の平生の役割、昭和初期における鉄鋼統制における平生の果たした役割等々を研究し、平生鈺三郎研究の一層の深化と進展をはかりたい。

●研究の特色

第Ⅰ期及び第Ⅱ期の研究が主として、平生鈺三郎個人についてのそれでもあるのに対し、今回の研究は、平生と彼をとりまく財界・政界・教育界・文学界、さらには歴史上の人物との対比を巨視的かつ微視的に行い、平生の日本近代史上における客観的位置付けを行うことをその特色としたい。

●総合研究として研究することの必要性

第Ⅰ期及び第Ⅱ期の平生研究を通じて明らかになったことであるが、平生の日記、自伝、その他明治・大正・昭和期の関連資料を検討すればする程、平生がたんに経済人・教育家・政治家・実業家にとどまらないことが、共通の認識としてこれまで研究にたずさわってきた者達にもたれた。そこで、さらに専門領域を異にする、外部の人達にも参加して頂き、平生と彼が生きた時代とのかかわりを総合的に検討する必要があるとの確信を抱くに至った。

●研究チームと研究の分担（○は研究幹事）

三島 康雄（営）第一次世界大戦期における実業家の生活史—平生鈺三郎を通して—

高阪 薫（文）平生鈺三郎と二葉亭四迷

○安西 敏三（法）平生鈺三郎における詩と真実—『自叙伝』の位相—

杉原 四郎（名誉教授）大正末期より昭和に至る大阪における一財界リーダーとしての平生鈺三郎

津田 内匠（一橋大学経済研究所）平生鈺三郎の東京商大に対する資金援助

長谷川雄一（八千代国際大学政経学部）平生鈺三郎の満州政策論

柴 孝夫（京都産業大学経営学部）川崎造船所社長時代の平生鈺三郎

岡崎 哲二（東京大学社会科学研究所）昭和10年代の鉄鋼統制における平生鈺三郎の役割

<公募によるもの>

女性と人生

●研究内容の概要

かつて女性の問題は抑圧された女性だけの個々の問題としてとりあつかわれてきた。しかし今日そういった時代は終りつつあり、従来の男性・女性のワクを越える新しい人間像が胎動していると我々は認識している。女性を論ずることが、とりもなおさず新しい文化を論ずることになる可能性を秘めている。このような展望のもとに本学の女性教員が、各自の研究の中で自然に抽出されてくる女性に関するテーマを持ち寄り、検討しあ

うことによって、各自の研究の興行を深め、新しい活気をふきこもうとするものである。

●研究の特色

この研究会は従来の「女性問題」を研究する会ではない。本学の女性教員がたずさわっている各分野の学問を、女性という側面で洗いなおしてみると、どんな新しい見方ができるかという問題意識から出発している。したがって、この研究会は本学の女性教員が中心となって活動するが、女性に限らず広く学内外にひらかれた研究会としたい。

●総合研究として研究することの必要性

あらゆる分野にわたる問題の中に、ひっそりと内含されていた「女性の問題」は今日激しいいきおいで表層に表われてきた。人類学・社会学・心理学・文学・体育学・経済学・法学・自然科学など、あらゆる科学の研究者達の知を集め、総合的に女性の問題にアプローチする。

●研究チームと研究の分担（○は研究幹事）

松尾 恒子（文）心理学と女性・平尾すゞとその時代

宮城 公子（文）日本史

斎藤 朋子（文）中世の女性

○上村くにこ（文）文学と女性のイメージ

石川・フランケ・サスキア（文）ヨーロッパの女性

上水流伸子（体）スポーツと女性

松尾 洋子（体非）スポーツと女性

名賀三希子（体非）スポーツと女性

池田 啓子（イリノイ大学）アメリカと女性

近代イギリスの比較文化史的研究

●研究内容の概要

本研究は過去2年にわたる「ヴィクトリア朝文化の研究」の成果をふまえ、更に幅広い学際的総合研究を志向するものである。研究会の構成員は9名、各研究員の研究課題は、概略次のとおりである。

渡邊は18世紀の文人たちと「クラブ・ストリート」との係わりを中心に、イギリスのサブカルチャーを研究、田中（秀）は、「オシアン論争」の研究をテーマに、啓蒙時代のスコットランドにおける文化的潮流の相克の究明を図る。村岡は19世紀のイギリスの中・高等教育の研究を通じて、イギリスの教養と文化の体質を探り、村松は同時代の小説に反映された親と子の諸像を研究対象とし、日本文学との比較をも試みる。杉原はミル、スペンサー、マコーレー等を中心に、近代イギリス社会思想のわが国への影響を研究、安西は日本近代思想の形成期における西欧文化摂取の一つのケース・スタディとして福沢諭吉に及んだJ.S.ミルの影響を実証する。高橋は「ミステリの比較社会的考察」を一本にまとめ、公有化史の研究を進めると共に、アイルランド問題の研究に及ぶ。田中（真）は1903年の関税改革を中心に、イギリスにおけるフリー・トレード思想の変容をテーマとして、イギリス経済学者、政治家の動向を研究、大陸諸国の思想との比較を図る。中島はブルームズベリー・グループの文化史的ミリューを考察、その中でヴィクトリア朝後期文化がいかなる変容をとげたかを究明する。

●研究の特色

- (1) 文、経、法の3学部所属の専任教員8名、ならびに本学名誉教授1名を構成員として計画された、学際的総合研究であること。
- (2) 近代イギリスに関する総合研究であるのみならず、近代日本の文化を視野に入れた比較文化的研究であること。
- (3) ヴィクトリア朝文化の研究の場合と同様、必要に応じてイギリス、アメリカ等における研究機関との交流を図ることが可能である。

●総合研究として研究することの必要性

18世紀以降今世紀初頭に至るまでのイギリスは、政治、経済、文化等、あらゆる面において多様な変化変貌

を経験した。これらの個々に関する研究が、相互間の連関性についての認識を深めることによって更に深化し、かつユニークなものになることはいうまでもない。しかもわが国の近代化の過程におけるイギリスとの関係を考慮に入れる以上、ますますもって歴史、経済、思想、文化等に関する専門的知識を集めた比較文化的総合研究の方法に依らざるを得ない。

●研究チームと研究の分担（○は研究幹事）

渡邊 孔二（文）文人たちの「クラブ・ストリート」—18世紀のイギリスのサブカルチャー研究—

田中 秀夫（経）オシアン論争—啓蒙と伝統の相克—

村岡 健次（文）19世紀イギリスの中等教育および高等教育

○松村 昌家（文）19世紀イギリス小説に見る親と子の諸像ならびに日本文学との比較研究

杉原 四郎（名誉教授）近代イギリス社会思想のわが国への影響

安西 敏三（法）福沢諭吉とJ. S. ミル

高橋 哲雄（経）公有化史およびアイルランド問題の研究

田中 真晴（経）フリー・トレード思想の変容—1903年関税改革を中心として—

中島 俊郎（文）ブルームベリー・グループの文化的ミリュール

ヨーロッパ、アジアにおける「日本的経営」—YKKの海外進出工場—

●研究内容の概要

立案者でもある研究幹事の問題関心にもとづいて、本研究は近年、世界的に注目をあつめている日本的経営、なかんづくその労務管理が、それぞれ文化を異にする諸国の労働者にどのように受容されているか、そこにどのような労使関係が生まれているかを、現地の工場見学・調査と、立入ったききとりによって確かめようとするものである。具体的には、調査対象をYKK吉田工業のファスナー工場にしほり（すなわち、技術・工程を統一することによって、「文化」の相違がよくわかるものと思われる）、YKK国内本工場（黒部）、同韓国工場、同ドイツ、イギリス、アイルランド工場、同タイ工場（以上6工場）の調査とききとりを行う。すでに吉田工業の了解を得ている。

●研究の特色

前記のとおり本研究は文献研究ではなく踏査である。参加者は産業論、経済史、労働問題に関する一定の知見の上に立って、吉田工業という海外に雄飛する企業の概要を学び、当企業の国内工場をくわしく調べたあと、それと比較するかたちでその海外諸工場を観察する。

●総合研究として研究することの必要性

熊沢は労務管理、労使関係を専門としているので、日本的経営における人事管理側面を焦点とする本調査のプロモーターとなるが、産業構造論、イギリス経済論の造詣ふかい高橋、そして韓国経済にくわしくハンゲルにも通じた滝沢の協力を得ることになり、ここに総合研究をすることにした。1988年の調査が成功裡に終れば翌年にはメンバー（他学部を含む）、調査対象国、対象工場の拡大も考えている。その意味では、これはパイロット・ケースともいえる。

●研究チームと研究の分担（○は研究幹事）

○熊沢 誠（経）立案およびすべての国の工場調査とききとり

高橋 哲雄（経）日本、ドイツ、イギリス、アイルランド工場の調査とききとり

滝沢 秀樹（経）日本、韓国の工場調査とききとり

わが国の金融制度改革

●研究内容の概要

現在、わが国の金融制度は歴史的ともいえる大きな変革の過程にある。戦後の経済復興と高度経済成長の過程を経て一定の歴史的役割を果たした金融制度は、いま新しいあり方を求めて模索し、大きく変化しつつある。経済・産業構造の変化、国民意識の変容、金融市場における自由化の進展、そして、国際的な金融業務の拡大

といった時代の流れに沿うよう制度の変革を行っていくことが必要となってきたのである。

最近、大蔵大臣の諮問機関である金融制度調査会の専門委員会が専門金融機関制度をめぐる諸問題を広範な観点から研究・整理して、その報告書が提出された。われわれの研究は、こうしたレポートを踏まえて、より専門的な立場からわが国の金融機関制度のあり方を検討し、具体的方策を示すことを目的とする。

◎研究の特色

金融制度は一国の歴史的所産であり、国情と歴史的環境条件によって規制され形成されたものである。そのためにその歴史的な重みや沿革的な経緯を追跡する必要がある。また、変転著しいわが国金融制度の正確なる現状把握に基づき、金融の先行が不透明な中での将来のあるべき姿を描こうとする。いわば動態的な分析を行う。制度の変更には必然的に利害関係の相反を伴うものであるから、その政治経済学的分析をも行い、マクロ経済全体の効率性を推進せしめるに適した制度の具体的枠組について議論を尽くす。

◎総合研究として研究することの必要性

今日、多面的な変化を遂げつつある、わが国の金融構造および金融市場の分析には多大な情報量の処理が不可欠である。また、学部間のみならず、外部の専門家を交えたところの研究は有益かつ刺激的である。従って、かかる分野に精通している研究者をスタッフに加えることは研究の成果がより生産的・効率的となる。

◎研究チームと研究の分担（○は研究幹事）

- 中島 将隆（経）金融革新の進展と金融制度の改革
- 鶴見 潔（営）金融機関の規制と金融制度の安定性
- 二上季代司（経非）民間金融機関における垣根問題
- 稲田 義久（神戸学院大学経済学部）金融制度改革の国際比較・数量分析

お知らせ

◎第7回総合研究所公開講演会

京都大学法学部教授 高坂正堯氏

昭和63年5月20日（金）午後3時から 10号館1階1012教室

演題 「アメリカの時代の考案」

◎第8回総合研究所公開講演会（予定）

岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所所長 岡田節人氏

昭和63年11月4日（金）午後3時から

◎研究所叢書の発行

叢書6 「アメリカの社会と文化」

S 63. 3 発行

—世紀転換期のアメリカ社会の構造分析—

叢書8 「シンボルと元型に関する研究」

S 63. 3 発行

本書入手ご希望の方は、総合研究所にお申し出下さい。

◎研究員の変更

「海浜社会の伝統と変容」チームに、J. ヒル氏（イリノイ大学人類学部教授）が新たに参加されます。なお同氏の研究課題は「子ども（小学生）の認知行動および学習行動の文化的・環境的変異に関する研究」です。